

サーカー プラウト (PROUT : Progressive Utilization Theory、進歩的活用理論)

サーカーは、「宇宙の富のすべてが生きてし生けるものの共有財産であるとするならば、あるものがぜいたくにふけり、あるものが食べるに事欠いて徐々に衰弱し餓死していくというようなシステムをどうして正当化できるであろうか」という根本的問いを發し、「プラウトは、生活に五つの最低限の必需品があると考え。①食べ物(飲料水も含む)、②衣服、③住居(下水設備とエネルギーを含む)、④医療、⑤教育、の五つである。追加的な必要性として、地域交通手段と灌漑用水である。ネオヒューマニズムによれば、これらは、市民権(シティズンシップ)を越えた生得の権利である」と言っている。その権利の実現の上に、「あらゆる人、あらゆるものを、至高の意識の表現として敬意をもって取り扱うこと」が目指されるのである。

サーカー プラウト (進歩的活用理論) (文責：岩崎)

ダダ・マヘシュバラナンダ著、岩崎監訳・松尾訳『資本主義を超えて』(世界思想社、2009)を基礎において、説明する。

1 ネオヒューマニズムと進歩的活用理論(プラウト)

サーカーの社会理論を理解するには、彼の「ネオヒューマニズム」を見るのがわかりやすい。彼は次のように言っている。

「今日、財産を持っている人は尊敬されます。しかしお金のない人は誰からも尊敬を受けません。貧しい人は、どんな立派な人であっても日々の生計費を得るために富裕者に懇願しなくてはなりません。人間的価値は意味のないものになってしまいます。人間は富裕者にとってお金をもうける手段となってしまうからです。富裕者は、人間の心をお金で買います。そして社交界では仲間とチェスなどのゲームに忙しくしています。あらゆるものを失っている人々はわずかの収入を得るため昼夜休みなく働きます。社会の指導的立場にある人々は、他の人々を信じず、絶えず損失と利益を計算しています。彼らは人間の窮状について考えようとはしません。」

ここには、人間と社会に対する彼のスタンスが率直に述べられている。そのなかの「人間的価値」は、本書では「基本的人間価値 **cardinal human values**」として示されており、『資本主義を超えて』第9章の「ブラフマチャリア」の項がその理解を助けてくれる。

「あらゆる人、あらゆるものを、至高の意識の表現として敬意をもって取り扱うこと。あらゆる存在が深い物的身体的、知的心理的、スピリチュアルな潜在力をもっているから、私たちの福利も互いに絡み合っている。スピリチュアルでもあり、エコロジカルでもある態度が求められる。私たちそれぞれが全体の部分である。私たちそれぞれが意識である。だから、私たちは、ある人の活動に反対する権利をもっている、その人を憎む権利はもたない。」(180頁)

人間は、物的身体的 (physical)、知的心理的(mental あるいは psychic)、スピリチュア

ル(spiritual)の三層からなり、それらは究極の存在である「至高の意識（あるいは宇宙意識）」＝ブラフマの分枝であるアートマン（個体意識）に根ざしている、とする。そのような存在として、「あらゆる人、あらゆるものを、至高の意識の表現として敬意をもって取り扱うこと」が言われているのである。

第3章「生きる権利!」の冒頭において、「プラウトは、生活に五つの最低限の必需品があると考える。①食べ物(飲料水も含む)、②衣服、③住居(下水設備とエネルギーを含む)、④医療、⑤教育、の五つである。追加的な必要性として、地域交通手段と灌漑用水である。ネオヒューマニズムによれば、これらは、市民権(シティズンシップ)を越えた生得の権利である。すなわち、これらの必需品は、その国のもともとの住民であろうが、外からやってきた人であろうが、あらゆる人間に保障されなくてはならない」(58頁)と言っているが、プラウトの基点が示されている。

近代の市民権(シティズンシップ)については、「これまでのヒューマニズム」として、次のような限界を指摘している。

一つは、「エセ・ヒューマニストの戦略に動機づけられている人々が、…自分たち自身の利己的な利益のためにこの戦略を用いています」。近代市民権の根幹である「自由」は競争の自由に、「平等」は形式的な機会の平等に変質しており、人間に対する実際の搾取や不公正をなくしていく力を失い、かえってそれらを隠蔽する役割を果たしているというのである。二つは、ナショナリズムという限界である。近代市民権は、ある国家の国家市民になることによって付与される権利であり、外国人には閉ざされていると共に、「ジェオ-センチメント」などの偏狭な帰属意識とより合わされて排外的なナショナリズムに傾斜していく。三つは、人間=中心主義である。理性による自然の支配という近代の考え方は、植物、動物、大地を開発の対象とし、地球の生態系を危機に追いやっている。サーカーは「基底にあるヒューマニズムの精神がこの宇宙のあらゆるものに対して、生物も無生物も含めて、拡大した時、それがネオヒューマニズムです」と言っている。

このネオヒューマニズムを物質的基盤から支える考え方が「宇宙的相続財産」である。

本書冒頭の「宇宙の富のすべてが生きとし生けるものの共有財産であるとするならば、あるものがぜいたくにふけり、あるものが食べるに事欠いて徐々に衰弱し餓死していくというようなシステムをどうして正当化できるであろうか」(7頁)というサーカーの資本主義システムに対する批判の言葉は、「地球は人類の宇宙的相続財産である」という考え方に基づいている。「すべての生命存在は、この相続財産の自分たちの正当な分け前を享受できる。…結合家族の一員として、人類はふさわしい方法でこの共有財産を保全し有効に活用utilizeすべきである」(38頁)と。

資本はその私欲によって「宇宙的相続財産」の浪費、篡奪を押し進めている。外国資本が農地を広大に買占め、輸出向けの現金作物を栽培することによって地域の生産力は偏ったものになり、地元民の生活は破綻していく。農産物は数千キロメートルの距離を運ばれていく。水資源の囲い込みも悲劇を生んでいる。工業資本は多くの便益を生み出して

いるが、同時に国内外に低賃金労働者・失業者と公害をつくり出している。たとえば自動車の大量生産と利用は、労働者の濃密な反復労働と下請け企業のコスト削減圧力、都市空間の混雑と事故死傷者、空気の汚染をもたらしている。

プラウト（Progressive Utilization Theory）は、「人類はふさわしい方法でこの共有財産を保全し有効に活用 utilize すべきである」という上記の一節にその命名の典拠をもっており、「進歩的活用理論」と訳すことができる。本書第3章の「プラウトの5つの原則」には、「人間社会の個体と集合体のフィジカル（物質的身体的）な潜在資源、形而上学的（知的心的）な潜在資源、スピリチュアルな潜在資源を最大限に活用すべきである」、「有用性活用の方法は時、場所、人の違いに応じて変えられるべきである。そして有用性活用は進歩的な性質をもつべきである」（68、70-71頁）と示されている。

2 資本主義批判の視座 —マルクス主義との対比

それでは、サーカーのプラウトが、これまでの資本主義批判の思想、とくにマルクスあるいはマルクス主義とどのように異なるのかをみてみよう。

サーカーの唯物論、 Kommunismus、階級についての考え方は、次のようである。

まず、マルクスの唯物論に対しては、「物質が全てであるとき、物質は人生の目標となってしまいます。その結果として、人間の存在、人間の意識、人間の心の主観的部分のすべてが大地と石のようなものになってしまうでしょう。そのような哲学は人間の発達に有害です。著名なカール・マルクスはその欠陥のある哲学を説きました」と言っている。しかし、一方で次のようにも言っている。「マルクスは、しかしながら、スピリチュアリティ、モラリティ、適切な振る舞いにけっして反対しなかったことを覚えておくべきである。」（150頁）

次は、Kommunismusに対する批判である。「共産主義諸国の経済は党に集権化しています。（中略）実は、中央集権化した経済においては経済学的搾取を根絶することができず、一般の人々の経済問題を永久に解決できません」、「共産主義は国家資本主義です」。これは、既存の共産主義体制の批判としての的を射ていると思われる。多くのマルクス主義者は、この点について、それはソ連型社会主義を導いた党の指導の誤りであり、マルクス理論そのものに責任はない、と反論するが、必ずしもそうは言えないことをあとで述べたい。しかし、サーカーの無階級社会を構想するアイデアは、Kommunismusの原型的なもの重なっている。「いかなる社会階級も社会を支配すべきではありません。もし、ひとつの階級が優越するならば、他の階級はかならず搾取されることとなります。それゆえ、誰にも、平等な機会と平等な権利が保証されるべきです。人間性の発達にとって、社会における調和ある調整が不可欠です」、「調和ある社会秩序において、誰も狂った犬のように名声と富を追い求めないでしょう。適切な外部環境が心理的バランスを得ることを助けるでしょう。そして人々の内的貧困は次第に減少するでしょう」。

三つは、階級のとらえ方である。マルクスは「すべてこれまでの歴史は階級闘争の歴史

であった」と言っているが、サーカーも「この世界が始まってからずっと、支配権力はある階級あるいは別の階級の手握られていた」（第7章冒頭）と言っている。しかし、サーカーの「階級＝ヴァルナ」論、「社会サイクル」論、「サドヴィブラ」論はマルクスのそれとは大きく異なっている。

「ヴァルナとは、ある環境のもとで生存と発達の特定のスタイルとして表現される心理的傾向である。ヴァルナはまた、収入や所有のレベルに基づく社会階級の分類とも異なる」（137頁）、と。「ヴァルナ」は、社会的分業における役割の特性から出てくる「心的色合い」であり、社会学の語彙を用いると、その集団や階層に共通な基本的経験と生活様式の結果として形成された「社会的性格」（E.H.フロム）と表すことができよう。そして、ヴァルナは、シュードラ（労働者）、クシャトリア（武人）、ヴィブラ（知者）、ヴァイシャ（商人）の四つあり、それらは時代を通じてそれぞれ被抑圧、革命、主導、支配、没落のサイクルをもちながら、支配の位置にある階級は順に交替していく（「反進化」「反革命」によって乱されることもあるが）という「社会サイクル」論を説いている。マクロな世界史の社会サイクルについては、本書第7章で説明されているのでそれに譲るとして、日本史における古代から現代までを6つのサイクルでとらえる松尾光喜の試論は興味深い（「日本史における社会サイクル試論」松尾『サーカーの思想 1』、2005）。

そして、これらの階級対立、社会サイクルを超えていくところに「サドヴィブラ」論が提起される。サドヴィブラは「文字通りの意味で、精妙な心をもった人々という意味である」（159頁）が、「あらゆる階級の良い資質を身につけ実行すること、発達した心をもつことは、すべての人に不可欠である。…しかし、もしサドヴィブラ（精妙知者）がそれを効率的にできなければ、サドヴィブラは発達することができない。一言で言えば、各人は四つの階級のすべての資質を身につけなくてはならない…。あらゆる人がそのようになり、よいヴィブラでもあり、シュードラでもある。…この無階級社会は単なる目標ではなく、…実践的に発達させられる。諸階級、諸セクトに分かれた社会を変えるこのアプローチは、これまでには考えられなかった。」（160-1頁）

四つのヴァルナには長所も短所もある。そのいずれもの長所を身につけることによってサドヴィブラとなり、階級を乗り越えようというのである。そうすれば、たしかに「この無階級社会は単なる目標ではなく、…実践的に発達させられる」であろう。

マルクスは、階級を生産手段の所有、生産関係における位置において客観的に規定したうえで、階級意識のありようを考察している。近代労働者階級（プロレタリアート）は、賃金アップ、労働条件改善など自分たちの利害を要求していく経済主義的（即自的）意識をもつが、さらに労働者の「総体的疎外」を克服しようとする普遍的（対自的）意識をもち、革命的主体を形成して新しい社会主義社会を主導する、と。しかし、プロレタリアートのリーダーたちは、社会主義建設の既存の過程では革命後には権力者化してしまい、他方、先進資本主義社会では、多くの労働者は、豊かになって小所有意識にとらわれるか、あるいはアンダー・クラスへ没落するかして、変革の領域から脱落していつている。人間

が対自的でありつづけることの難しさが示されているが、マルクスは「対自的」であることを認識論的にのみ探究している。その意味で、サーカーがこれを道徳的、スピリチュアルに広げて「サドヴィプラ」として構想していることは、その限界を超えていく可能性をふくんでいる。